

百年に一度の好機

—最善の努力が創り出す現場力—

2009年1月1日

増田 優

「百年に一度の危機」が語られ世界に緊張感が走っている。大きな危機であることは間違いない。しかし、本当に百年に一度というほどの危機、すなわち今生きている人々が経験したことの無いような大きな危機であろうか。

米国にとっては確かにそうかも知れない。しかし、世界大戦の戦火で街々が灰燼に帰した経験を有する欧州の人々や往来を止める壁が築かれそして壊されていった経験を有する東欧の人々、そしてソビエト連邦の崩壊とともに生活が激変した経験を持つロシアの人々にとっては如何であろうか。ましてや、世界の動きにその都度翻弄されてきたアジアやアフリカの人々にとってはどうであろうか。それはこの百年の間に幾度も経験したありふれた危機の一つにすぎないのではなかろうか。

日本にとってはどうであろうか。第二次世界大戦が危機であったことは論を待たない。しかし、日本社会は石油危機やバブル崩壊といった危機にも直面してきた。とりわけ 1973 年に勃発した第一次石油危機は社会に大きな変動をもたらした。石油やエネルギーの統計のみならず経済や産業の統計を見ても 1973 年でグラフは折れて、構造変化が起きたことを示している。

物不足の恐怖から商店に殺気だった人々の長蛇の列ができ、デモ隊が都心に溢れ、そして出刃包丁を持った陳情団が現れた。30 年間の日本社会の成長の賜であろうか、昨今の状況はそれほどではない。困難に直面する人達を支援するボランティア活動の存在は、誰もが役人に望みを託し役所に押し掛けた石油危機の時にはなかった事象である。欧米諸国に比べてどうであるかは別として、阪神淡路大震災の時以来見受けられるこの事象は社会の進展を象徴している。

跳ね上がった原油価格に引きずられて狂乱物価といわれるほど諸物価が高騰し、経済は大混乱に陥った。過去 30 年間の日本経済の成長のお陰か昨今の経済の状況はそこまで至ってはいない。良いか悪いかは別として国会も、長年培われてきた伝統を打ち破って委員会を定例日以外にも開催しさらに麗しき慣例を打ち捨てて開会時間を朝から夜まで延長した当時ほどではない。今回の経済危機を石油危機ほどではないと多くの関係者が認識している証左ではなかろうか。日本社会に諸々の事柄にじっくりと対処する余裕をもたらした膨大な蓄積をつくりだした過去の努力の積み上げに感謝の念を禁じえない。

しかし油断は禁物である。石油危機に直面し必死の努力によって 10 年間という短い歳月の内に危機を克服した。国民生活と国際競争力にかかわる死活的な危機を省エネルギーに取り組み経済構造を変革する契機として捉え、機敏に行動して経済の土台を固める好機とした。今回もその志を捨てさえしなければ、

「百年に一度の危機」は「百年に一度の好機」となる。そして日本社会の蓄積の今昔の差異を考えれば、成功の可能性は石油危機の当時よりも遥かに高い。

日本は 1960 年代に高度成長期を迎えた。旺盛な内需に支えられた高度成長期はすなわち貿易赤字の時代でもあった。景気が良くなると貿易赤字と外貨不足の拡大に陥り、この矛盾の前に泣く泣く景気を減速せざるを得なかった。いわゆる「国際収支の天井」である。日本の貿易収支が赤字基調から黒字基調に転じたのは 1970 年であった。石油危機が勃発するわずか 3 年前である。

その後、日本の貿易黒字は年々拡大の一途をたどっていく。唯一の例外は、第一次と第二次の石油危機の起こった 1973 年と 1979 年そしてそれぞれの翌年である。両石油危機によりそれぞれ原油価格が 10 倍そして 3 倍と急騰した。これに伴い原油はじめとするエネルギー資源への支払いやその他諸々の資源に対する代金が急増し、貿易収支の黒字基調を相殺してなおかつ足りず大幅な赤字を計上する事態となった。

しかし日本は幸運であった。この事態がそれよりもわずか数年前に起きていたらどうなっていたであろうか。東海道新幹線の建設資金が足りず世界銀行から必要な資金を借りた高度成長期に起きていたら様相は全く異なっていたであろう。世界の多くの途上国がそうであったように、資源購入のための膨大な借金のために自転車操業を余儀なくされ、挙句の果てに返済不能となり経済の破綻を招いたかもしれない。わずか数年の違いが運命を分けたのである。

この幸運は偶然の産物であろうか。地震はいつか必ず起こるが何時起こるかは天のみぞ知る。石油危機を予測した人が仮にいたとしても何時起こるかは誰も分からない。天才の知恵にも限界がある。日本を救った事柄の本質は別の処にあるのではなからうか。高度成長期に人々は額に汗し力を尽くして働き、そして技術を習得した。その結果高度成長期は 1970 年代の声を聞くとともに終わり、貿易黒字の時代を迎えた。もし仮に人々が最善の努力を怠り高度成長期の終焉が数年後ろにずれ込んでいたら、その後の日本の状況は破滅的なものであったに違いない。

今日できることを明日に持ち越さない。技術は力であり学習は尽きせぬ泉である。日々最善の努力を尽くすことこそ幸運をもたらした本質ではなからうか。危機に瀕してこれを好機に転嫁するといっても特別なことではなく、現場を起点に日々積み重ねてきた最善の努力を危機に際しても尽くしていくことではなからうか。危機が何時起こるかを予測する才能を持つ人は少なく、現実にはいないのかもしれない。しかし、日々最善の努力を尽くしてやまない才能は多くの人々が共有している。

禍福は糾える縄の如し。そして危機と好機もまた糾える縄の如し。危機を機敏に活かし転換の契機と成し得れば、それは好機の始まりである。逆に好機に機先を制することなく機会を逸すれば、これは危機の伏線となりかねない。最善の努力が創り出す現場力によって「百年に一度の危機」を「百年に一度の好機」に転化することができる。

石油危機の乗り切りと社会や経済の変革に技術革新が果たした役割は大きかつ

た。今回の危機に際しても技術革新とそれによる社会変革に期待する声が大である。社会技術革新学会はこうした技術革新と社会変革とのかかわりを論じる場を提供するのみならず、現場起点学会を標榜する学会として製造、販売、研究、経営などの企業活動の現場で、そして NGO や政府機関などの活動の現場で日々積み上げられている最善の努力を世の中に示す場でもある。そして、社会の全ては専門人材の能力と社会の教養の水準に依拠しているとの認識の下、社会技術革新学会は研究の場であるとともに、社会人教育の試みとして全国に大きく新展開しつつある「知の市場 <http://www.chinoichiba.org/>」とも連携しながら教育の場としても機能している。

社会の多彩な現場の多様な方々の参画を期待している。